

「学んで備えて命を守る」

渋川市立渋川中学校 二年 水江 智哉

ぼくは朝、新聞を読むことが日課です。なぜならば群馬県のことだけでなく、日本や世界中のニュースを知ることができると多いため、気になったことは、後でもう一度読み返しができるからです。最近新聞を読んでいると多いのが、災害のニュースです。地球温暖化による異常気象で、強力な台風や線状降水帯、ゲリラ豪雨での甚大な被害が起きている所があります。自分の住んでいる町で起きていないと、どうしても他人事になりがちですが、実際にはどこでもおこりうると思ったほうが良い時代になったのではないかと思います。

ぼくの住む渋川市も周囲を山で囲まれ、大きな川も流れています。なので豪雨による土砂災害が発生する恐れが十分にあると考えました。テレビで他県で起きた土砂災害の映像を見ると、想像を絶する様子に、ただただ驚くばかりでした。渋川市でも大きな土砂災害が起きたらと思うと、しつかりと土砂災害のことを知り、どうやって身を守るかを学ぼうと決意しました。

調べてびっくりしたのは、ぼくの家から約一キロの所でも、昭和二十二年の九月、カスリーン台風による山津波で、家や納屋などが埋まり、二名の死者が出たことがわかりました。まさかとしか言いようがなかった。

では、土砂災害とはどういうことか。それは山や崖が崩れ、その崩れた土砂が雨水や川の水と混じり、流れてきたりすることによって、建物や畑を押し流す災害で、大雨だけでなく、火山の噴火や地震などもきっかけで発生します。大きく分けると、土石流、地すべり、崖崩れに分類できます。テレビや新聞で見かけるのは、圧倒的に土石流と崖崩れが多いのではないかと思います。

ぼくは実際にカスリーン台風で起きた山津波の現場へ徒歩で行きました。すると、正に土砂災害のパンフレットに書いてある絵のような光景が広がっていた。山の斜面は急で、谷のようになっている場所には川が流れ、どう見ても水が集まりやすそうな場所でした。山津波はきつとあつという間に流れてきたと思う。今、現場の下流には多くの家が建っています。もし、同じことが起きれば死者二名どころではなかったと思つた。ぼくの亡くなった曾祖父は、この現場から五百メートルくらいの所に住んでいました。生きていたら、この災害の話が聞けたかと思うと、とても残念な気持ちになり、この時ぼくは、語り継ぐことの重要性が身に染みて分かりました。

恐ろしい土砂災害から命を守るには、何でも無い日にこそ、備えておくことが大切です。家の近所に崖や沢、川やため池、土砂災害警戒区域の看板がありませんか。日頃から自分の目で確認し、いざという時の避難経路を考えておくのと良いと思います。そうすることによって被害を最小限に抑えることができます。ハザードマップも役立つでしょう。

そして、家族みんなで防災のことを話し合い、家族が離ればなれになっても連絡できるように、連絡先やこの避難先へ行くかをあらかじめ決めておくこと。また、非常用持ち出し袋の中身も、家族で必要なものがあるかもしれないので、各家庭で中身や何を持ち出すか、役割分担を決めることも重要です。

雨が降り始めたら、土砂災害警戒情報に注意し、テレビやスマートフォンを活用し、気象情報をチェックしよう。避難する際は、近所のお年寄りや障害のある人たちに積極的に声をかけ、早めに避難すると良いと思つました。特に夜間は暗く足元が悪いので注意が必要です。避難指示が出ていなくても、危険を感じたらすぐ避難しましょう。迷っているより行動です。

今年の夏休みに仙台へ旅行へ行きました。ホテルをチェックアウトするとき、スマートフォンが大きな音をたて、津波警報のお知らせが来ました。ぼくはとてもしつくりしましたが、ホテルの従業員の人が優しい声で、「ここは内陸なので大丈夫ですよ。でも、観光で海の方には行かないようにして下さい。」と案内してくださいました。その言葉を聞いて、ぼくはとても心強かつたです。知らない土地に来て、まさか津波警報が出るとは思つていませんでした。渋川市も、観光で他県から多くの人が訪れています。災害が予想される時は、ぼくたち渋川の人たちが、避難誘導や避難所、危険なところの案内が積極的にできたらいいなと思つきました。

災害は二度と同じ災害は起こりません。危険がせまったときに自分の命を守るのに大切なことは『早めの避難です。』あの時、こうしておけば良かったと後悔しない為に、尊い命を失わないように。